

# 吉井勇脚色、「地獄変」台本翻刻

——芥川龍之介「地獄変」の舞台化——

峯村 至津子

京都女子大学図書館所蔵の貴重書に、「地獄変絵巻」という卷子本一軸がある（請求記号 911.16 / Y91 資料ID: 196001519）。芥川龍之介の王朝物、『古今著聞集』『宇治拾遺物語』などに取材した「地獄変」（『大阪毎日新聞』夕刊、大正七年五月一日～二十一日、『東京日日新聞』大正七年五月二日～二十二日、初出）を題材に、日本画家吉村忠夫（明治三十一～昭和二十七（一八九八～一九五二）年）が小説の内容を全八葉の絵に描き、吉井勇（明治十九～昭和三十五（一八八六～一九六〇）年）が登場人物や物語内容についての感慨や解釈を詠んだ和歌八首を付けたこの絵巻については、これまで稿者が本学発行の書籍類に資料紹介を執筆してきた<sup>①</sup>。但しこれらは、絵巻の書誌的事項と内容とをごく簡潔に紹介するのみであったため、現在、杲由美氏（本学国文学科・大学院国文学専攻非常勤講師）との共同研究で、原作である芥川龍之介の小説「地獄変」との比較、吉村と吉井との接点及び絵巻作成の経緯、推定される作成時期等について調査を行っており、その成果は別途公表予定である。今回はその前段階として、本絵巻に先行すると見られる一資料、京都府立京都学・歴史館が所蔵する吉井勇資料「地獄変」（資料管理番号：文学004、文書番号：2190）を、翻刻し、一覧に供する。本資料は、吉井によって舞台化された「地獄変」の台本である。

吉井勇が脚色した舞台「地獄変」は、昭和十年十月に築地東京劇場で上演された。『読売新聞』昭和十年九月二十六日朝刊十二面には東京劇場の十月興業前売り開始の広告が掲載されており、十月一日開場の一番目の演目として「地獄変二幕」「芥川龍之介原作 吉井勇脚色並演出 小村雪岱装置」とあり、「逝ける文壇巨匠の代表的逸品、問題となる劇化こゝに完成して悲惨なる場面、名工の法悦等まざく」と舞台に躍動」といった煽り文句が付されている。歴彩館所蔵の資料は、起稿・脱稿などの年月日の記載はないが、この舞台化のための台本と見られ、四百字詰め原稿用紙六十七枚に万年筆で書かれた吉井勇の自筆資料である（一括して京都府立総合資料館の住所・電話番号等が記載された茶封筒に収められた状態で保管されている）。舞台「地獄変」の台本については、『吉井勇全集』全八卷（昭和三十八〜三十九年 番町書房）、その複製である『定本 吉井勇全集』全九卷（昭和五十二〜五十四年 番町書房）に収録されておらず、その全貌を知ることができなかった。今回閲覧した資料は、削除や加筆等修正の跡が甚だしい紙も多く、これが初稿と見られるため、これを更に改稿したものが存在した可能性も否定できない。しかし、台本には吉井自筆の鉛筆書きで割付の指示がなされている箇所もあり、この台本を印刷したものが出演者等舞台関係者一同に配布されたことも十分考えられる。『演芸画報』第二十九年第十一号（昭和一〇・一一・一 演芸画報社）には、深井紫による舞台「地獄変」の概要が掲載されているが、それと本台本の内容が一致していることも、その証左となり得るであろう。この台本の存在によって、舞台地獄変の全貌が明らかになり、芥川の原作に吉井がどのような脚色を施しどこに力点を置こうとしたのかを窺うことができるようになる。簡単に紹介すると、横川の僧都と良秀とが闘わずかなり長尺の地獄問答（ノンブル18〜20ノ2）や、病床に臥す堀川の大殿の許に完成した地獄変の屏風を携えて伺候する良秀と、横川の僧都・大殿との三者会談及びその末に袂を分かつ最終場面（ノンブル59〜65）など、原作に大きく脚色が施された場面が存在し、仏道の法力をも屈服させる芸の力がわかりやすく際立つように作品化されている。本学所蔵の『地獄変絵巻』の関連資料というに留まらず、芥川作品の受容という観

点からも、参照すべき資料の一つであると見られる。

『演芸画報』の同じ号には、雪岱による舞台装置が見て取れる写真や森茉莉の劇評、主人公の絵師良秀を演じた市川左団次、堀川の大殿を演じた澤村訥子らが執筆した記事なども掲載されており、こちらを含め、当時の新聞・演劇雑誌所載の劇評や「地獄変」舞台化に当たつての吉井勇自身の雑感等、舞台「地獄変」に関わる資料については、杲氏との共同研究に於いて調査中であり、その詳細は別稿に譲りたい。芥川の原作、舞台「地獄変」、注(2)に記した「名作絵物語」、そして『地獄変絵巻』、これらの内容を比較することで、その成立の経緯もある程度明らかにすることができると思われる。それは、芥川の小説の享受の一端を窺うことにもなり、同時に、木村莊八の『たけくらべ絵巻』(大正十五(昭和二(一九二六)一九二七)年)など大正時代からしばしば行われていた近代の小説を絵巻に作るという文壇の潮流との関わりなどを検討する材料にもなり得るのではないかと考えられる。こうした研究の前段階として、今回舞台「地獄変」台本の翻刻を示すことに、基礎作業としての意義を認めることができるだろう。

#### 【翻刻凡例】

- ・ 原資料はB4版四百字詰め原稿用紙、縦書き。万年筆で書かれている。
- ・ 用紙右上に算用数字でノンブルが付され、下線が引かれている。途中から、ノンブルと実際の枚数とに齟齬が生じているが、ノンブルは原資料に記載の通りとし、注記で、実際の枚数を【】内に補って示した。
- ・ 稿者による注記は、「」に入れて示した。
- ・ 原稿には多くの加筆修正が施されている。読みやすさよりもその執筆の試行錯誤の跡を可能な限り見て取りやすく示すことに留意した。

- ・加筆は、前後の行間や、前後の行の文字の入っていない部分に書き込まれていることが多いが、原稿用紙の上下左右の欄外に複数行に亘る書き込みがなされている場合もある。加筆部分はおおよそ原稿と同じ位置に配置したが、改行や行の移りについては原稿そのままの形を反映できていない。付記すべき事項がある場合は「」内に注記した。
- ・行間に書き込みがある場合は、行を余分に設け、行間であることを「」内に注記した。
- ・行間及び欄外の書き込みは、文字を□で括り、原資料では吹き出しで指示されている挿入箇所と加筆部分の双方に「\*1」というようにアスタリスクと数字を付し、それらを照合することによって修正加筆の跡を把握できるようにした。\*の後の数字は、原稿用紙毎に新たに1から振り直すようにした。なお便宜上、一部アルファベット小文字を使用した所がある。
- ・句読点の加筆については、煩雑を避けるため、挿入の指示がある箇所に□で囲んで入れ込んだ。
- ・翻刻中の●は、一旦書かれた文字が塗りつぶされて判読できない箇所を意味する。
- ・削除された箇所の文字が判読できる場合は、消されている文字も翻刻し、その上に||を付して見せ消ちとした。
- ・原稿用紙の空白のマスは、□で示した。
- ・原稿用紙のマスを無視して、例えば二マスに一字、四マスに三字、などというように記されている箇所が随所にある。また、原資料ではト書きがパーレン（ ）で括られ示されているが、括弧に原稿用紙一マス分を使用せず、前後の文字と同じマスに記されている箇所が多い。句読点についても同様に、一マス分を使用せず、前の文字と同一のマスに入れられ、その後が一マス分空白になっている箇所がある。こうした内容に関わらない原稿用紙の使用法については、厳密に反映はできていない。翻刻のベースラインが揃っていない箇所があるのはそのためである。こうした箇所について、一々の注記は省略した。



2

堀川の若殿。  
横川よかはの僧都。  
康清、老マヤひたる侍臣。  
經光、若き侍臣。  
狹霧、堀川殿の女房。  
螢火、全。  
眞孤、全。  
近侍。  
仕丁。  
侍童。  
僧。  
「良秀」と呼ばれる猿。  
その他。  
上の巻。  
その一。

〔ここまで一枚目。〕

3

〔ここまで二枚目。八行目以降は空白。〕







\*2 楚ちほを振り上げながら

\*5 ええ、おのれ

※ 一字下ゲ

□□□間もなく遣戸の向ふで若殿の聲が聴こ

□□□える。□□□□□□□□□□□□□□□□□□

若殿の聲。ええ、柑子盗人め。待て、待て。

□□□猿は今度は柑子を手を持つて遁げ出して

□□□間もなく遣戸の向ふで若殿の聲が聴こえ

□□□<sup>1</sup>の聲あ。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

若殿<sup>1</sup>。ええ、柑子盗人め。待て、待て。□□□

□□□猿は今度は柑子を手を持つて遁げ出して

一字下ゲ

\*3 懸

□□□〔来る。若殿は\*2それを追ひか\*3けて出づ。十七八<sup>4</sup>

若殿。<sup>5</sup>遁げやうとて遁がすものか。奪ふた柑

□□□子を早う戻せ。ぬすつと猿の良秀め。ん

□□□を馬鹿にして遁げ廻あな。□□□<sup>6</sup>懸□□□□□□

若殿は足を踏み鳴らして追ひか<sup>6</sup>けるけれ

ども、猿は敏捷に遁げ廻つて●●●<sup>7</sup>へら

\*7 捉

れない。□□□□□□□□<sup>8</sup>人を馬鹿にして遁げ廻るな。

若殿。よおし、おのれ、\*8もうこの上は、□打ち殺

〔行末一文字下欄外に書き込み。〕〔ここまで四枚目。〕

〔\*2への挿入部分、四・五行目の上欄外に書き込み。〕

〔行間書き込み。ゴチック部分は鉛筆書き指示。〕

\*4 歳位の眉目美しい青年である。

〔行末\*4への挿入部分、五～九行目の下欄外に書き込み。〕

〔\*5への挿入部分、七行目の上欄外に書き込み。〕

〔行頭※印部分、九～一一行目の行頭一字半ほどを使用し、鉛筆書きで指示。〕

〔\*7への挿入部分、中央柱、魚尾下方に書き込み。〕



\*4 わけてお赦し  
を願ひたいの  
でございます。

\*1 何と申しても

存じませんが、●●●●●●<sup>\*1</sup>畜生のごとで  
 ございます。どうか御勘弁遊ばして下さい  
 います。

\*2 を

若殿。(足を踏み鳴らし頭●<sup>\*2</sup>振つて) いや、いや、

勘弁致すことはならぬ。そちはまた何で

その猿をかばふのぢや。その丹波の山猿

は、柑子盗人の不届きものなのだぞ。□

夕月。<sup>\*3</sup>柑子盗人かは存じませんが、何分畜生

<sup>\*3</sup>仰せの通り不届きな<sup>1</sup>のことでございま

\*5 つてか

すから、<sup>\*4</sup>(寂しさうにほほ笑み●●●<sup>\*5</sup>ら)そ

れに<sup>\*6</sup>ながこの猿のことを、良秀々々と

\*6 現在

\*7 わたくし

申しますので、□●●●●●●<sup>\*6</sup>娘の●<sup>\*7</sup>の身にな

つて見ますと、父が御折檻を受けますや

うで、如何も唯見ては居られませぬ。ど

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔<sup>\*4</sup>への挿入部分、一四・一五行目の行間〜一六・一七行目

の行間にかけて、上欄外に書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

□□うか命だけは、助けてやつて下さいまし。

あ

若殿。(點頭いて) さうか。父親の命乞ひと●<sup>\*8</sup>

□□らは致し方がない。枉げて赦してとらす

一字としよう。命冥加な山猿だな。はさささ。

下ゲ

以下同じ「若殿はそのまま遣戸の向ふへ入る。□□

1つて

2を

3やうに

夕月。(猿に向●<sup>\*1</sup>人にももの<sup>\*2</sup>云ふ<sup>\*3</sup>可哀さう

□□に。畜生のことゆゑ分別もなく、欲しい

4頭からの

□□と思つて奪つたものを、<sup>\*4</sup>柑子盗人●●<sup>\*5</sup>

□□の御折檻は、<sup>\*6</sup>きぞ辛かつたよまあゆり。

6ああやつて、

□□しかしもう<sup>\*6</sup>お赦しが出たからには、いつ

□□ものやうに遊んでゐたがいい。とは云へ

7これから

□□もう<sup>\*7</sup>今のやうな悪あがき、<sup>\*8</sup>お叱りを受け

<sup>\*8</sup>それからまた  
<sup>\*a</sup>何時  
<sup>\*a</sup>おぞやのやうに、曹司の壘を泥<sup>せ</sup>は<sup>せ</sup>し、  
<sup>\*b</sup>足でて穢

〔ここまで六枚目。〕

〔ノンブル6とあるが、実質七枚目。〕

〔行頭ゴチック部分、二行目〜二・三行目の行間にかけて鉛筆書き指示。〕

鉛筆書き指示。〕

〔行頭ゴチック部分、三行目上欄外から書き込まれた鉛筆書き指示。〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

<sup>\*5</sup>呼ばはりは、あんまり酷いなされ方。

〔<sup>\*5</sup>への挿入部分、五〜一〇行目の下欄外に書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔<sup>\*8</sup>への挿入部分、九〜二行目の上欄外〜行頭一マス分を使って書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

\*13  
これこの  
やうに

□□るやうな\*9いたぢゆを、再びしてはなりま

□□せぬぞ。□\*9悪戯□□□□□□□□□□

□□猿はその言葉を解するもののやうに、點

□□\*11懸\*10聴いてゐたが、やがて悄々と

□□頭きながら\*10往きか\*11ける。□□□□□□\*12待ち

夕月。(気が付いたやうに呼び留めて) ああ、●\*12

□□や、待ちや。今お姫様から頂戴した黄金こがね

□□\*15まで\*16あ

□□の鈴、\*13\*14真紅の紐●\*15付いてゐ\*16る。これをそ〔\*13への挿入部分、一七行目の上欄外に書き込み。〕

□□なな\*14美しい進すすませう。□□□□□□□□

□□夕月は猿を引き寄せて、□取り出した紅紐

□□の黄金の鈴を、猿の首筋のところ懸け

□□\*1は\*2鈴の音を立て

□□てやる。猿\*1うれしさう\*2に首を振り、□\*2ながら

□□夕月の周りを飛び廻る。□□\*3臣\*4康□□□□

□□遣戸の向ふより老ひたる●\*3待\*4惟\*5清出づ。\*5五十六七歳位の老人だが、一目で純情な男だと云ふことが分る。

□□\*6康\*6惟清。ああ、夕月どの。相変らず猿めを大事

□□\*7成

〔行間書き込み。〕

〔\*5への挿入部分、一七行目の行間、八行目にかけての下欄外に書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔ここまで六【七】枚目。〕

〔右欄外書き込み。〕





□□入ります。こら辺でお目通り致したいと存じます。〔行末三字分、欄外。〕

大殿。遠慮には及ばぬ。その畜生ゆゑに沙汰

□□<sup>\*11</sup>の話

□□<sup>\*12</sup>聴き及ん

〔行間書き込み。\*12の挿入部分、行末二字分欄外。〕

□□致したのぢや。今若殿から委細<sup>\*11</sup>を●●<sup>\*12</sup>

□□●だが、さてさてそちは孝行なやゆ<sup>\*13</sup>ぢや。

□□褒めてとらずぞ。□□□□□□□□□□<sup>\*15</sup>仰<sup>\*13</sup>もの□□

夕月。<sup>\*14</sup>何と仰しやいます。孝行と申<sup>\*15</sup>しやい

□□ますと。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□<sup>\*16</sup>はさささ。

大殿。(笑つて) <sup>\*16</sup>自分では何も気が付かぬのぢ

□□やな。そち●<sup>\*17</sup>みなが良秀々と、□□そちの

□□父親●<sup>\*18</sup>名をその猿に付けて、ひどい目に

□□會はせるのをいとしがつて、<sup>\*19</sup>おとまきは可

□□愛がつてゐるばかりか、今日は若殿が柑

□□<sup>\*1</sup>ぢやと云ふ

□□子盗人<sup>\*1</sup>と<sup>\*1</sup>て、<sup>\*2</sup>折檻をした時に、命乞ま

□□<sup>\*2</sup>でしてやつた<sup>\*2</sup>責めと云ふことではない

□□か。それと云ふのも、すべて父親を思ふ

□□孝心から出たこと、感じ入つたればこそ

\*14 (不審さうに)

〔\*14への挿入部分、一七行目上欄外に書き込み。〕

〔ここまで八【九】枚目。〕

〔行間書き込み。〕





【\*1戴】

【\*2こ】

□□げて同じやうに押し頂\*1く。一同のもの●\*2

【\*3どつと】

□□れを見て聞音\*3に笑ふ。□□□□□□□□□□

大殿。(機嫌よく) はささささ、猿めが味をやり

□□居るわい。畜生ながら可愛いやつぢや。

□□これからはこの猿の些細な悪●がき位は

□□許してやれ。さうぢや。そこにある柿と

【\*4と】

□□栗とを猿に取\*4らせい。□□□□□□□□□□

\*5 【\*6傍の臺に盛つてあつた柿と栗を】  
□□若殿が\*6柿と栗とを\*7投げてやると、猿●\*8そ

□□\*9同じやうに【\*7手掴みにして】  
□□\*11近侍れをまた\*9押し頂く。卍開\*10笑ふ。□□□□□□

【\*9同じやうに】

【\*7手掴みにして】

□□\*11近侍れをまた\*9押し頂く。卍開\*10笑ふ。□□□□□□

女席

近侍\*11●●の一人出づ。□□□□\*10みんなはまたどつと□□□□

女席

【\*12近侍】  
\*12近侍。横川の僧都様がお見えになりました。

〔右欄外書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。\*5への挿入部分、五・六・七行目行間上欄外に書き込み。七・八行目行間に挿入指示〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔中央柱魚尾上部に書き込み。〕

〔\*12への挿入部分、上欄外に書き込み。〕

\*5 若殿。それ、  
褒美をやるぞ。



\*2 でした

〔行間書き込み。〕

大殿\*1。久しくお目に懸かりませなん\*2だが、相も変らぬ権者の面影、大腹中の御器量を拝し、悦ばしく存じます。

大殿。御言葉にて痛み入ります。阿闍梨様に

もお変りなく何よりも珍重のことと存じます。(思ひ出したやうに) 承はれば先日は、\*3 中でも  
横川あたり

\*4 殊に \*5 夥しか

比叡の御山\*3に、夥しい落雷があつたとのこと、格別のお障りもございませぬ\*6か。

\*6 んでした

〔行間書き込み。〕

こと、格別のお障りもございませぬ\*6か。

\*8 に

〔行間書き込み。〕

僧都。7いや。8横川あたり8落雷のあるは毎度の笑つて) こと、別に何ごともござりませんでし

〔行末四字、下欄外に書き込み。〕

た9せぬ。それよりも殿には先立つて来朝の、華陀くわだの術を傳へた震旦の僧に、おんもも禪ぜんの瘡かさをお切らせになつたさうな。

大殿。(これも笑つて) 試みに切つて貰ひましたが、

□□いささかの痛みもなく、まことに名手と存  
 □□せられました。これも法力の●●\*10でござら

\*10ため

〔行間書き込み。〕

□□う●かな。□□□□□□□□□□□□□□□□

僧都。(この言葉にきつとなつて)されば殿、震旦の

〔ここまで一一【一二】枚目。〕

\*2に瘡をお切らせになつてさへ、直ぐに法力のためと思はるほどの〔右欄外に書き込み。〕

\*1はかり

〔右欄外書き込み。〕

□□僧の法力まで、かく\*1深く信ぜらるる\*2殿が、

\*3仔細

〔行間書き込み。〕

□□如何なる譚\*3あつて良秀のやうな繪師に、

□□地獄変の屏風を描くやうにお吩咐になつ

□□たのでございますか。□□□□□□□□□□□□

大殿。●●●●●●や、それは。(云ひ懸けて口を嚙む)

僧都。\*4良秀は高名な繪師には違ひありません

\*4〔言葉をつづけて〕が、強情我慢の横道者。いつも本朝第一

\*5ぢや

〔行間書き込み。〕

□□の繪●師\*と申すことを、鼻の先へぶら下

□□げて居ります。それも画道の上\*6ならばま

\*4への挿入箇所、七行目上欄外へ行頭二文字分使用し、書き込み。

〔行間書き込み。〕

□□だしものこと、世間の習慣ならはしとか□□<sup>6</sup>のみ慣例しきたり

□□とか申すことまで、すべて莫迦にせずに

□□は措かないのでございます。わたくしの

□□行状●ちやと申して、あらぬ戯画ざれゑを描き

□□ましたのも、あのつむじ曲りの良秀でこ

□□ございました。□□□□□□□□□□□□□□□□

大殿。(遮るやうに) いや、良秀の評判の悪いこ

□□とは、今さら阿闍梨の口から聴くまでも

□□<sup>7</sup>居り

□□なく、わたくしもよう存じてゐます。□□

□□<sup>8</sup>いませ

僧都。まだそればかりではござぬ<sup>8</sup>。良秀は

□□たしかに●<sup>9</sup>魔<sup>10</sup>の生れ変りでござるぞ。現

□□<sup>9</sup>天

□□<sup>10</sup>外道破句はたはやく

□□<sup>1</sup>悪

□□にいつぞや檜垣の巫女に御<sup>1</sup>壺が憑いて、

□□<sup>2</sup>怖ろ

□□●<sup>2</sup>しい御批宣があつた時も、あの男は空

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔左欄外に書き込み。破句は原稿のママ。〕〔ここまで一二三枚目。〕

〔右欄外に書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

□□耳を走らせ●ながら、有り合せた筆と墨

□□とを取り上げ、その巫女の物凄い顔を、●<sup>\*3</sup>さりげなく

□□<sup>\*4</sup>で<sup>\*5</sup>い

□□●●寫して居つたとのこと<sup>\*4</sup>は<sup>\*5</sup>ござります。

□□あの男から見ましたならば、御<sup>\*6</sup>霊の崇り

□□<sup>\*7</sup>取るに足らぬ事ぐらゐ

□□などと申すことは、子供だま<sup>\*6</sup>大方<sup>\*7</sup>悪し

□□<sup>\*8</sup>もうよいではないか。

□□●●にしか、□思はれなかつたのでございませ

□□う。

大殿。鼎肴（苦笑をして）阿闍梨どの。<sup>\*8</sup>わた●し

□□<sup>\*10</sup>誰よりも

□□は良秀のことに就ては、<sup>\*9</sup>仰<sup>\*10</sup>才<sup>\*10</sup>御<sup>\*10</sup>ませよう

□□知つてゐるのだから。

□□<sup>\*12</sup>いや、いや<sup>\*13</sup>のやうな絵師

僧都。<sup>\*11</sup><sup>\*12</sup>あの良秀<sup>\*13</sup>に、□<sup>\*14</sup>ものもあらうに地獄変の屏

□□<sup>\*14</sup>けと<sup>\*15</sup>あ

□□<sup>\*11</sup>（首を振つて）□□風を、□描<sup>\*14</sup>くやうは<sup>\*14</sup>お吩咐<sup>\*15</sup>にな<sup>\*15</sup>るやうでは、

□□<sup>\*11</sup>への挿入部分、一四〜一五行目上欄外に書き込み。

□□<sup>\*3</sup>への挿入部分、三・四行目の行間、四・五行目の行間にかけて下欄外に書き込み。

□□<sup>\*4</sup>で<sup>\*5</sup>い

□□<sup>\*6</sup>への挿入部分は次行中に書き込みあり。

□□<sup>\*7</sup>取るに足らぬ事ぐらゐ

□□<sup>\*8</sup>もうよいではないか。

□□<sup>\*8</sup>への挿入部分、九行目行末三マス半〜下欄外にかけて書き込み。

□□<sup>\*10</sup>誰よりも

□□<sup>\*10</sup>への挿入部分、九行目行末三マス半〜下欄外にかけて書き込み。

□□<sup>\*9</sup>仰<sup>\*10</sup>才<sup>\*10</sup>御<sup>\*10</sup>ませよう

□□<sup>\*9</sup>日頃の行ひはもとよりのこと、今何を考へてゐるかと云ふことまで、

□□<sup>\*12</sup>いや、いや<sup>\*13</sup>のやうな絵師

□□<sup>\*11</sup>への挿入部分、一四〜一五行目上欄外に書き込み。

□□<sup>\*14</sup>けと<sup>\*15</sup>あ

□□<sup>\*11</sup>への挿入部分、一四〜一五行目上欄外に書き込み。

\*16 お

□□ よう知つて●\*16 めでになるとは思はれませ

\*17 申し

□□ ぬ。第一良秀の繪となり\*17 ますと、何時も

\*18 怪しい噂

□□ 必ず気味の悪い、妙本誹聞\*18 ばかりが立つ

□□ ではございませぬか。たとへばあの男が

□□ 龍蓋寺の門へ描きました、五趣生死の繪

□□ に致しましても、夜更けて門の下を通り

□□ ますと、天人の嘆息をつく音や啜り泣き

□□ をする聲が、 聴こえると申すことではござい

\*2 臭

□□ ました。いや、中には死人の●\*12 \*1 びを嗅い

\*4 あつたので

□□ だ\*3 申すものさへ\*4 ございしました\*5。

\*6 現に

\*1 腐つてゆく

〔行間書き込み。〕

□□ ぞ\*3 とれから\*6 大 殿様のお吩咐で描いた、

\*7 で

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔ここまで一三【一四】枚目。〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕







康清 眞光。はゆトかしこまりました。それではお通\*12

〔行頭二文字、上欄外に書き込み。〕

眞光 ● \*13元来たところへ入る。\*12し申しませう。

\*13康清はまた徐かに

〔中央柱、魚尾の前後に書き込み。〕

僧都。殿。\*14直々良秀に申し聞けてもよハ

うござ \*15地獄変の屏風の繪のことに就て、ハ

\*16るかな

〔\*14への挿入部分、二〜四行目の上欄外に書き込み。〕  
〔行間書き込み。〕

\*17〔笑つて〕ますか。\*16

\*19その代りにはこの場に於て、如何なるお説があらうと  
\*18も、わたくしは唯聴聞の役、一切口は挿みませぬぞ。〔\*19への挿入部分二行目下欄外も使用し二行分ち書き。〕

\*18それは

〔行間書き込み。〕

大殿。\*17どうかそれはお心まかせに願ひ致します。\*19

\*20康清

〔行間書き込み。〕

眞光 \*20に導かれて良秀出づ。眞光は車ハ●。

良秀。(平伏して)直々にお目通りを願ひ、恐れ

入つてござります。

大殿。遠慮には及ばぬ。ずつとこちらへ通つ

たがよい。

\*21で

〔行間書き込み。〕

良秀。(憎しげなる目)\*21僧都の方へ注ぎながら)し〔ここまで一五【一六】枚目。〕

かし尊い阿闍梨様と御同席は如何かと存

\*<sup>3</sup>良秀。それでは  
ご免下さいまし。  
遠慮なく御同席  
致しませう。  
良秀はつかつか  
と\*<sup>a</sup>入り、横川の  
僧都と\*<sup>b</sup>対する。  
\*<sup>b</sup>座

じまして。常々\*<sup>1</sup>魔障にでもお遇ひになつ  
僧都。たやうに、お憎\*<sup>1</sup>わたくしゆ御●●\*<sup>2</sup>しみにな

つてゐると聴き及びま\*<sup>2</sup>のことと申しますと

したゆゑ、わざと差扣へゐるわけなので

ございます。□□□□□□□□□□□□□□□□

僧都。大殿のお許しがある上は、左様なこと

を申さずと、ずつと通つたらよいではな

いか。□□□□□□□□□□□□□□□□

大殿。それにまた阿闍梨様には、この度わし

の吩咐けた地獄変の屏風のことに就て、

直々お訊ねになりたいことがおありにな

ると云ふことぢや。□□□□□□□□□□□□□□□□

\*<sup>3</sup>〔行間に挿入指示。〕  
〔\*<sup>3</sup>への挿入部分、一一一七行目の上欄外へ行頭一マス分に書き込み。〕

良秀。（急に反抗的な顔付になつて）如何なるこ

とを、お訊ねになるかは存じませぬが、法

師には法師の心があると同じく、繪師にも

繪師の魂がございます。繪師風情とあ

などつて、迂闊にもものをお訊ねにならぬや

□□う、前以てお断り申して置きますぞ。□

大殿。これ、良秀。何を申すのぢや。□□□

僧都。いや、良秀の申すこと、\*1本朝第一の繪

□□師だけあつて、智羅永寿\*1さすがはのやう

□□で面白うございます。□□□□□□□□

良秀(きつとなつて)なに、智羅永寿とな。阿

□□閻梨様。智羅永寿とは昔震旦から渡つた

□□天狗の名ではございませぬか。□□□□□

僧都。さうぢや。そちの今の増上慢の言葉、

□□智羅永寿にたとへ\*2が何で悪い。□□□□□

良秀。いやしくも良□\*2た秀は天下の繪師、如

□□何に尊い横川の僧都ぢやと申しても、天

□□狗狗賓におたとへになるは、近頃無禮に

□□存じますぞ。(調子を変へて)がしかしかや

□□うな言葉づかひを、一々咎め立て致してゆ\*3

\*3すのも

□□ては詮ないこと。それよりも唯今\*大●殿□□

□□よりお話のあつた、地獄変の屏風に就て

〔ここまで一六【一七】枚目。〕

〔行間書き込み。〕

□□のお訊ねを、良秀改めてお伺ひ致したう  
 □□存じます。□□□□□□□□□□□□□□□□

僧都。それでは改めて訊ね申さう。先づ訊く

□□が、そもそもそちは直道\*4とは如何なるも

□□のと心得居るのぢや。\*4地獄□□□□□□□□

〔\*1への挿入部分、右欄外から、四行目までの下欄外に書き込み。〕  
 〔\*1ここまで一七【一八】枚目。〕

\*1 弥陀の浄土に対して五悪趣 ● 蓮と名づくる五つの境界のひとつ ● でございませ  
 ●● 地獄の外に餓鬼、畜生、人、天 ● の四つがありますが、

良秀。(冷かに笑つて) されば地獄とは、\*1地下の

□□牢獄と申すことかと存じます。梵語に

□□ては那落迦、即ち俗に云ふ奈落のこと

□□ございまして、総じてこれを三 ● \*2に別 ● \*3

□□ます。□□□□\*4類□□\*5のうちの第一と□□\*2類□□\*3ち

僧都。うん、その三 ● \*4 ● \*5申すは。\*8その傍にある

良秀。一は根本地獄\*6 八大地獄、\*7 \*8 せむらに加ふるは〔二字分下欄外にかかる。〕

□□ ● 八寒地獄。 ● \*6としての\*7ある □□\*7或ひはそれを八熱地獄  
 〔\*6・\*7への挿入部分、二行分ち書き。〕

僧都。第二は。\*9 八大地獄の四門に四ヶ所、合せて

良秀。二は\*9 近迎地獄、十六\*10 遊増地獄。

僧都。第三は何ぢや。 □□□□□□□□□□

【\*10ケ睨づつある】

〔魚尾の下方に書き込み。〕

〔行間書き込み。〕 【\*12これは\*13 (以下、\*13への挿入部分、八〇行目の行末各三マス及び一〇・一二行の行間から用紙末尾までの下欄外に書き込み。】

良秀。\*11孤独地獄。\*12山間曠野樹下空中などにあるも

□□ゆ。【\*11三は猶詳しく申せば、瞻部洲の地下五

□□百踰繕那のところに地獄はあつて、先づ

□□第一を等活と云ふ。これより次第に、黒

□□繩、衆合、號叫、大叫、炎熱、大熱、無

□□間の八つ、これを八大地獄、或●は八寒

□□地獄に對して、八熱地獄とも申すのでこ

□□ざいます。 □□□□□□□□□□□□□□□□

僧都。うん、それでは八寒地獄と云ふのは。

良秀。前の八大地獄は、豎に重つたものでこ

□□ざいますが、八寒地獄は横に連な●\*1居

【\*1つて】

〔行間書き込み。〕

□□ります。類浮陀、尼羅浮陀、阿羅々、阿

□□婆々、虎々婆、囉波羅、波特摩、摩訶訶

□□波特摩 阿波々、阿吨々、阿羅々、阿婆

\*13 八寒八熱地獄の如くに定まるところあるにあらず。 各人制禦の惑するところの地獄にして、或ひは虚空、 或ひは山野に散在して居ります。

々、<sup>う</sup>優波<sup>ら</sup>\*羅、<sup>は</sup>波特<sup>ま</sup>\*摩、<sup>く</sup>拘物頭、<sup>ふ</sup>分陀利、

この八<sup>2</sup>鉢<sup>つ</sup>に<sup>3</sup>頭<sup>別</sup>れて居りまして、<sup>6</sup>この地獄に落ちました

<sup>4</sup>名

<sup>5</sup>しい

<sup>7</sup>人

〔行間書き込み。〕

この<sup>4</sup>畫葉の意味は激<sup>5</sup>\*寒<sup>さ</sup>のため、 <sup>6</sup>罪<sup>7</sup>の<sup>6</sup>〔<sup>6</sup>への挿入部分、七・八・九行目の行間にかけて下欄外書き込み。〕

身が、或ひは青い蓮華の如く、或ひは紅

<sup>8</sup>ころ

〔行間書き込み。〕

の蓮華の如く、 裂けると<sup>8</sup>本<sup>8</sup>に由来してゐ

ると、寡聞ながら聴き及んで居ります。

僧都。成程、<sup>9</sup>さすがは<sup>9</sup>地獄<sup>の</sup>屏風を描かう

とするだけあつて、<sup>9</sup>それでは<sup>9</sup>の数は●

すべてでいくつあるか知つて居るか。

良秀。根本地獄の八熱に、各<sup>10</sup>遊増の<sup>10</sup>十六ありの

あり。合せて百三十六地獄。

僧都。してまた地獄に墮する業因は。

良秀。十悪すべて地獄に墮つ。

僧都。さればその十悪とは。

良秀。殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、悪口、

<sup>1</sup>貪

<sup>2</sup>を

〔ここまで一九【二〇】枚目。〕  
〔右欄外書き込み。〕



綺語、●<sup>1</sup>慾、瞋恚、邪見、これは<sup>2</sup>十悪業、  
 或ひは又十不善業と申します。

僧都。それほど地獄のことを知つてゐるもの

が、如何に大殿のお吩咐ぢやとは云へ、

世にも怖ろしい地獄變の屏風を、描かう

と思ひ立つたのぢや。

良秀。藝<sup>3</sup>道の上から申<sup>4</sup>ますと、地獄であら

うが何であらうが、見るも●のの魂を揺り動

かすやうな、力のある優れたものを描けばよ

いのでございます。いや、<sup>5</sup>画道はかりなく、す

べての藝と申すものは、     さう云ふも

ではないかと、憚りながら存じます。

僧都。しがいや、いや、如何に一藝一能に秀

でた者でも、怖ろしきことを怖ろしとせ

ず、醜<sup>6</sup>きを●のを醜<sup>7</sup>しとせぬやうなものは、

必竟地獄に墮つるであらうぞ。

〔行間書き込み。〕

〔行間書き込み。〕







見たものでなければ描けませぬ。わたくし  
 しがこれまでに描きました繪は、<sup>\*5</sup>悉く眞  
 を寫し実を描いたものばかり、

いつぞや<sup>\*6</sup>お吩咐に依つて描きま  
 した稚<sup>\*6</sup>やはり 兄文珠の繪も、  
 ご寵愛の童の顔を寫しました。

<sup>\*5</sup>龍蓋寺の門  
 の五趣生死の  
 図を始め  
 として、

わたくしは如何も現在この目で見たもの  
 でなければ、よし描けたと致しましても、

得心●することが出来ませぬ。得心出来  
 ぬものなれば、描けぬも同じことではご  
 ざいませぬか。

大殿。(<sup>\*1</sup>微笑を浮べて) それでは地獄変の屏風を

描<sup>\*1</sup>いやや皮肉な かうとすれば、 地獄を見ね  
 ばな<sup>\*2</sup>まいのう。

良秀。(眞面目に點頭いて) 左様でございます。

が、わたくしは先年<sup>\*2</sup>大火事がございませし<sup>\*3</sup>  
 た時、炎熱地獄の猛<sup>\*2</sup>鼎<sup>\*2</sup>火にもまがふ

〔<sup>\*5</sup>への挿入部分、一八〇行目の行末四文字分を使用し、  
 下欄外にかけて書き込み。〕

〔(一)まで二二【二四】枚目。〕

〔<sup>\*3</sup>への挿入部分、八〇二行目の下欄外に書き込み。〕

<sup>\*3</sup>て、わが家も類焼致しまし











狭霧。かしこまりました。□□□□□□□□□□  
 □□女房達 御酒を運んで来るが、良秀はま  
 □□だ疊に両手をついたまま、じつと身動き  
 □□もせずに考へ込んでゐる。□□□□□□□□  
 □□遠く若殿の朗詠の聲が聴こえて来る。  
 □□□□□□□□その 二□□□□□□□□□□  
 □□堀川の邸。□□□□□□□□□□□□□□  
 □□長廊下。□□□□□□□□□□□□□□  
 □□夜。月明り。□□□□□□□□□□□□□□  
 □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□  
 □□遣戸を開けて良秀出づ。大分酔つてゐる。  
 □□若き近侍貞光紙燭を持ちて先に立つ。□  
 貞光。氣を付けてお出でなさいまし。危なう  
 □□<sup>(お)</sup>ごさいますぞ。□□□□□□□□□□□□□□  
 良秀。いや、この位の酒ではまだ大丈夫でご  
 □□ざいます。殿様には大分お酔ひになり、  
 □□お就寝<sup>ひけ</sup>になつてしまはれたゆゑ、御挨拶  
 □□も申上げませなんだが、どうかよろしう

〔ここまで二七【二九】枚目。六行目以降白紙。〕

〔一・二行目の行間に位置。二行取り。〕

〔三行目。〕



遣戸<sup>3</sup>が<sup>\*</sup>の向ふで人の云ひ争つてゐる聲が

慌ただしいうちにもひつそりと、廊下の方

へ傳はつて来る。

夕月の聲。あれ、何をなさいます。どうかお

離し下さいまし。

殿様の聲。何もさう遁げるには及ばぬではな

いか。

夕月の聲。いえ、いえ、いけませぬ、いけま

せぬ。そのやうな悪戯をなされますと、

宿直の者を呼びますぞえ。

殿様の聲。さうか<sup>4</sup>くな<sup>5</sup>を云ふものではない。

<sup>\*4</sup>頑

<sup>\*5</sup>事

さあ、わしの云ふことを。

夕月<sup>●</sup>の聲。(叫ぶ。) あれ、誰か来て。

殿様の聲。(荒々しく) ええ、勝手にするがいい。

激しく御札懸か<sup>1</sup>る<sup>\*</sup>もの音がすると同時に、

遣戸が<sup>1</sup>體<sup>\*</sup>を打ち付ける。弾かれたやうに倒

れて、袴や袷をしどけなく乱した夕月が、

〔行末一字分、下欄外に書き込み。〕

〔左欄外に書き込み。ここまで二九【三一】枚目。〕





- を見てからは、如何も心配でなりません。  
 良信。その心配はわたしとても同じことだ。  
  それから直ぐ後であらう。ほんやりここ  
  へ入つて来られると、おれは少し午睡を  
  しやうと思ふが、近頃は如何も夢見が悪  
  い、就ては眠つてゐる間枕もとに座つて  
  めて貰ひたいと云はれるのだ。      
 秀起。如何して急にかう心弱くおなりになつ  
  たものか、昨日堀川かゆお●\*1何ごとかあ  
  つたのではありませんま\*1のお邸でいか。    
 良信。何も仰しやらぬから分らぬが、或ひは  
  何事かあつたのかも知れない。しかし今  
  のところは、よくお睡みの御様子だから、  
  安心してあちらに往つてみたがよい。   
 秀起。それではあちらに往つて居ります。   
  秀起は去る。            
  短小聞暫くすると良秀は悪夢に壓はれ  
  たやうなもの凄じい叫び聲を立てる。

〔ここまで三二【三四】枚目。〕

良秀。□なに、おれに來いと云ふのだな。何  
 □□處へ——何處へ來いと云ふのだ。なに、  
 □□奈落へ來い。炎熱地獄へ來い。——誰だ、  
 □□さう云ふ貴様は。——□お、誰だと思  
 □□つたら貴様おのれだな。おれもおのれだ  
 □□らうと思●てゐた。なに、迎へに來たと  
 □□云ふのか。うん、さうか。だから來い。  
 □□奈落へ來い。奈落にはおれの娘が待つ  
 □□てゐると云ふのか。なに、早く——この車  
 □□に乗つて來い。待つてゐるからこの車に  
 □□乗つて、□奈落へ來いと申すのか。ううん、  
 □□おのれ——□□□□□□□□□□□□  
 □□良秀は矢庭にそこに匆ね起きたが、まだ  
 □□悪夢の中の異類異形が瞳から去らないや  
 □□うな眼差で、じつと空を見つめてゐる。  
 □□良信は叫び聲を聴くと同時に、繪の具を  
 □□溶く手を留めておろおろし●から「お師匠  
 □□様、しつかりなさいまし」と云ふ言葉を繰



〔ここまで三三【三五】枚目。〕

□□り返してゐたが、気が付いたのでやつと  
 □□安心して聲をかける。□□□□□□□□□□

良信。ああ、お師匠様。気がお付きになりま

□□したか。□□□□□□□□□□□□□□□□

良秀。うん。地獄の夢をまざまざと見た。剣

□□山刀樹も焼き爛れるかと思はれるばかり

□□の紅蓮の猛火——もの凄しく渦を巻く無

□□明の闇の黒煙——金<sup>\*1</sup>砂子を撒き散らした

□□やうな火の粉までが、<sup>\*1</sup>の<sup>□</sup>まだありありと

□□見えるやうな。(急に感興を覚えたやうに)

□□良信。わしは鎖で縛られた人間が見たい。

□□気の毒でも暫くの間、わしのするやうに

□□なつてゐては呉れまいか。□□□□□□□□

良信。(脅えたやうに)それはお師匠様のお吩咐

□□ならば、何なりと<sup>\*2</sup>仰せの通りに致します

□□が。□□□□□□□□□□□□□□□□  
<sup>\*2</sup>も□□□□□□□□□□□□□□□□

<sup>\*3</sup>うん、それではわしの云ふ通になつてゐて呉れ

良秀。ネネ、何を愚図々々してゐるのぢや。<sup>\*3</sup>

〔行間書き込み。〕



**\*<sup>4</sup>蝙蝠のやうに逆さまになつた生受領**

〔行間書き込み。〕

刺された●●●●●●<sup>\*4</sup>ぢや。

良秀は更にもう一枚  良信の姿を寫す。

寫し終ると又鈴を引きて形を変へる。

良秀。(前と同じやうに) 今度は千曳の盤石に

體を壓された念佛僧 ぢや。

同じやうに寫生をし、終るとまた形を変

へるために鎖を引く。 **\*<sup>5</sup>これは**

良秀。(呻くやうに) うん、<sup>\*5</sup>面白い。 ●●●●●●

**\*<sup>1</sup>毒龍の顎に噛まる**

の嘴にかけられた<sup>1</sup>陰陽師の姿そつくり

ぢや。

寫生、鎖を引くこと前と同じ。

良秀。(狂喜して) あれ見い。牛頭馬頭の鋸叉<sup>さすまた</sup>

に髪をからまれて、蜘蛛のやうに手足を

縮めた青女房がそこにあるぞ。

良秀が夢中になつて良信の~~まま~~<sup>ま</sup>まな姿

を寫生してゐるうちに、部屋の隅に置い

〔ここまで三五【三七】枚目。〕  
〔右欄外に書き込み。〕

- てある壺の中から、まるで黒い油が流れ  
  出すやうに、一匹の蛇が這ひ出して来て、  
  鎖の喰ひ込んだ良信の頸へその舌の先を  
  觸れやうとする。□□□□□□□□□□□□  
 良信。(びつくりして起き上がる) ああ、蛇が。  
  お師匠様。蛇がまりました、蛇がまる  
  りました。□□□□□□□□□□□□□□□□  
  良秀\*<sub>2</sub>さすがにぎよつとしたが、咄\*<sub>3</sub>嗟に身  
     \*<sub>2</sub>も      \*<sub>5</sub>を  
  をかが□□め\*<sub>4</sub>●蛇●\*<sub>5</sub>吊り下げる。□□□□□□  
 良秀。(忌々しき\*<sub>4</sub>尾を掴んでうに) 不届きもの  
  めが。おのれゆゑにあつたら惜しい一筆  
  を、遂に描き損じてしまふたぞ。折角の  
  ところへ這ひ出し居つて、不埒なやつ、  
  すつ込んで居れ。□□□□□□□□□□□□  
  良秀はそのまま蛇を隅の壺の中に抛り込  
  んだが、すっかり感興を失つてしまつた  
  様子。夢から覚めたものやうに、冷た

〔行間書き込み。〕

〔ここまで三六【三八】枚目。〕

- い顔付で良信の鎖を解いてやる。□□□□
- 良秀。(空洞のやうな聲音で) 御苦労であつた。
- 良信。(手足をさすりながら) お師匠様。お役に
- 立ちましたか。□□□□□□□□□□□□
- 良秀。(不機嫌に) 立たうが立つまいがよいでは
- ないか。(寫生した紙を拾ひ集めながら) □
- 殿上人——生受領——念佛僧——陰
- 陽 師——青女房——まだ足らぬわ。
- 毒龍の顎(あご)に噛(か)まるる女の童——高足駄
- を穿(う)いた侍学生——それに大事なのは
- 昨日堀川の大殿にお願(ねが)ひした、\*1中空か
- ら宙に舞ふて落ちて来る、
- 檳榔毛の牛車ぢや。火焰□
- に包まれた簾の中には、女御更衣とも
- 見まがふばかり●、綺●\*2びやかに装つた女
- \*2 羅
- 房が、丈の黒髪をなびかせて、悶え苦し
- んでゐる姿が見える。は~~~~~。□□□□

〔\*1への挿入部分、一七〜一八行目の行末六マス分を  
使用し、書き込み。〕

〔左欄外に書き込み。ここまで三七【三九】枚目。〕



□□てゐるのは澤山はあるまい。□□□□□□

□□良秀が微かに口笛を吹くと、□□耳木菟は直ぐ

□□に飛び下りて来てその手に留まる。□□

良秀。(鳥の背を撫でながら) よし、よし、賢い鳥

□□ぢや。(思ふところありげに冷たく笑つて) それ、

□□よいか。首尾よく勤めたら餌をやるぞ。

□□良秀が合図をするやうに、□□<sup>\*1</sup>背中を叩くと、

□□耳木菟は急に飛び立つて、□□<sup>\*1</sup>軽く<sup>\*2</sup>良信の顔

□□を突きに懸かる。□□□□□□

良信。あれ、何をするのだ。お師匠

□□様。助けて下さいまし。助けて下さいま

□□し。□□□□□□□□□□□□□□□□

□□<sup>\*3</sup>か

□□<sup>\*4</sup>叫び

□□良信●<sup>\*3</sup>さう<sup>\*4</sup>ながら、立つては防ぎ、

□□座つては逐ひ、部屋の中をあちらこちら

□□と逃げ廻る姿を、良秀はまた紙と筆とを

□□取り上げて一心に寫す。□□□□□□□□

良秀。(ほほ笑みながら) うん、面白い形ぢや。

<sup>\*2</sup>鋭い啼き聲  
を立てながら

〔九・一〇行目行末四マス下欄外にかけて書き込み。〕

〔行間書き込み。〕





□□秀起。弟子どもは居らぬか。急いで●\*2

□□を持つてまゐれ。灯ぢや、灯ぢや。□□\*2灯

□□間もなく秀起を先きに弟子達二人、各灯

□□を手に持つて、急いで部屋に入つて来る。

秀起。お師匠様。如何なされました。□□□□

良秀。わしは如何も致さぬが、奥僧は如何レ

\*1わしの今

□□\*1\*2\*1寫した紙を見失ふたのが心マかが

秀起りぢや。□□□□□□□□□□□□□□□□

□□良秀は●そこに氣を失つて倒れてゐる良

□□信の方は見向きもせずに、一しよう懸命

□□に今描き棄てた紙を拾ひ集めてゐる。□□

秀起。おお、良信どのが氣を失ふて倒れてゐ

□□る。おお、床も疊も一面に油だらけぢや。

□□秀起は\*2良信を抱き起す。□□□□□□□□□□

秀起。良信□□\*2油の流れた上に倒れてゐるどレの、良信

□□どレの。□□□□□□□□□□□□□□□□

良信。(やつと気付いて) ああ、秀起か。あの怪

〔ここまで四〇【四二】枚目。〕

〔右欄外に書き込み。〕

□□しい鳥は如何致した。□□□□□□□□□□

秀起。怪しい鳥と云ふと。□□□□□□□□□□

良信。何でも二三日前に鞍馬の獵師が持つて

□□来たと云ふ耳木菟と云ふ鳥ぢや。□□□□

□□良信は脅えたやうに四辺を見廻してゐた

□□が、そのうち脅れ<sup>3</sup>聲を立てる。□□□□

良信。あつ、あす<sup>3</sup>驚いてこにある、あすこに

□□ゐる。首から翼へかけて、あの黒い蛇が、

□□<sup>4</sup>きりきり巻きにしてのたうつてゐる。あ

□□<sup>4</sup>すわがゆ

□□<sup>1</sup>秀起。おお、成程、怖ろしい。怪しい鳥を黒い蛇が。

□□あ、怖ろしい。□□□□□□□□□□

\*1

□□良秀はその前からこれを見付けて、夢中

□□になつて寫してゐたが、腹立た<sup>2</sup>げに弟

□□子達に向つて叫ぶ。□□□□□□□□□□

良秀。ええ、うるさい。<sup>2</sup>黙つて居らぬか。地

□□獄変の屏風の<sup>2</sup>折角●心に寫して居るのに、

〔左欄外書き込み削除。ここまで四二〔四三〕枚目。〕

〔右欄外に書き込み。〕

〔行間に挿入指示。〕















\*2 良信。  
良信介抱する

良秀。良秀は貞光の強力に押し隔てられて、

\*1 そこにへたへたと

〔行間書き込み。末尾三文字下欄外にかかる。〕

〔\*2への挿入部分、三・四行目上欄外に書き込み。〕

□□□まるで失神したもののやうに、朧の座\*1  
□□□は束つて、崩折れてしまふ。□□□□□□

\*2

〔行間、\*2挿入指示。〕

大殿。(冥官のやうな凄じい聲音で) 火をかけい。

□□□仕丁等はその聲\*3を聴くと、同音に「おう」と

□□□云ふ聲を闇に\*3言葉響かせながら、各手に

□□□持った松明を車に向つて投げ付ける。車

□□□は忽ち炎々と燃え上がる。□□□□□□

□□□庇についた紫の流蘇が、煽られたやうに

□□□さつと靡くと、白い煙が渦を巻いて、簾、

□□□袖、棟の金物などを包む。火の粉が雨の

□□□やうに舞ひ上がつて、焔はめらめらと袖

□□□格\*4に搦みながら、夜の空高く立ち騰つて

□□□ゆ\*4子く。□□□□□□□□□□□□

□□□良秀は再び立ち上がったが、今度は唯食

□□□ひ入る。やうな眼差で、じつと車の方を見



□□ある車の中へ十文字<sup>\*2</sup>に飛び込む。□□□□

大殿。おお、猿が<sup>\*2</sup>まつしぐら<sup>\*1</sup>来をつたな。□□□□

惟清。おお、猿ちや、猿ちや、可哀さうに。

□□無言でゐたみんなの間に、「猿だ、猿だ」と

□□云ふ叫きがざわざわと起る。□□□□□□

□□猿は焼け落ちる袖格子の火の粉を浴びな

□□がら、のけ反つた娘の肩に抱き付き、帛

□□を裂くやうな鋭い啼き聲を、二聲三聲悲

□□しさうに立てる。□□□□□□□□□□

□□その瞬間、嬢ぱつと舞ひ上がった黒煙の

□□中に娘の姿も猿の姿も押し隠されて、庭

□□には唯猛火に包まれた一輛の車が、凄ま

□□じい音を立てて燃えてゐるばかり。  
\*1地獄の責苦に悩んでゐたやうな、

□□しかしこの時には良秀の顔からは、<sup>\*1</sup>本中

□□まの悲痛な表情は<sup>\*2</sup>すっかり消え、恍惚と

□□した法悦の輝きが、満面に明るく現はれ

□□てゐる。□□□□□□□□□□□□□□

大殿。大殿はそれに引きかへ、顔の色も青ざめ

〔ここまで四九【五一】枚目。〕

〔\*1への挿入部分、七行目行末ニマス〜一〇行目の下欄外にかけて書き込み。〕



- 僧都は猶燃えてゐる車の方に向つて合
- 掌しながら、低い聲で経を誦しはじ
- める。
- 良秀が夢見るやうな眼差で、ふらふらと
- 車の方へ近付かうとするのを、良信が無
- 言のまま引き留める。良秀は恍惚として
- 指先で画を描くやうな形をする。
- 数知れぬ怪鳥の\*<sup>4</sup>聲がしたかと思ふと直ぐ
- に止む。
- 後には唯横川の僧都の誦経の聲。
- 
- 
- 堀川の邸。
- 對屋の一部。勾欄、妻戸など。夕方。
- 
- 
- 
- 几帳のあなた\*<sup>1</sup>木殿の\*<sup>2</sup>褥があ\*<sup>3</sup>て、そこに
- 大殿が病臥してゐるのだけでも、こち
- らからは見えず。

\*<sup>5</sup>修法祈祷

\*<sup>1</sup>に

\*<sup>2</sup>置疊をした\*<sup>3</sup>つ

\*<sup>4</sup>啼き

〔ここまで五一【五三】枚目。〕

〔一・二行目の行間に位置。二行取り。〕

〔三行目。〕

## \*4 奥の方に

\*4 護摩壇があつて加持\*5の僧達がその前に座  
  つてゐる姿が見える。

狭霧、螢火、眞孤の三人の女房。

狭霧。\*6 殿様のお悩みには、如何なる加持祈祷

\*6 大も、あんまり●げん験が見えないやうで

すね。

螢火。丁度もうこれで一月あまりになります

けれども、いつも夕方になりますとあの

やうに、咽喉の渴いた獣のやうな、呻き聲

を立ててお苦しみになります。

眞孤。それと云ふのも夕月どのを、生きなが

らの焦熱地獄、無残に焼き殺した祟りだ

などと、誰の口から洩れたものか、世間

で噂をしてゐるさうでございます。

狭霧。ほんとに●う云ふ噂と云ふものは、案

外早く傳はるもの、わたくしの聴きまし

たところでは、それと云ふのも叶はぬ恋

〔行間書き込み。〕

〔ここまで五二【五四】枚目。〕

の恨み\*1などと云ふ取沙汰を、まことしや  
  かに致\*1だして居りました。

螢火。しかし大殿様が臯禿罪のない夕月どの

を、ああして無残にお焼き殺しになるの

のには、何か深い仔細があるのだと、わ

たくしには考へられますけれど。

眞菰。それがはつきり分らぬだけに、世上で

致す噂もとどどり、大殿様を かほ ふものは、

車を焼き人を殺してまでも、屏風の画を

描かうとする繪師根性の曲まげなのを、 懲らす

おつもりだつたのに違ひないと申して居

りますが、これもわたくしには信じられ

ません。

\*2 それ

狭霧。しかしどなただか大殿様が、●●\*2と同

じやうなことを、お口づから云つておる

になつたのを、伺つたことがあると申

して居りました。

〔「かばふ」の箇所、一マス空白、ルビのみ。〕

〔行間書き込み。〕

〔網掛け部分の濁点、稿者が補った。〕〔こゝまで五三【五五】枚目。〕

- 螢火。それならば大殿様の●思し召しは、最
- 初から夕月どのを焼き殺すおつもりでは
- なかつたのでございませうか。
- 眞菰。しかし大きな聲では申されませ●が、
- 大殿様が夕月どのに心を寄せておるでに
- なつたことは、<sup>1</sup>わたくしがよう知つて居
- ります。現在わ<sup>1</sup>誰よりも   たくしは或る夜
- 更けに、<sup>2</sup>廊下の曲り角、<sup>3</sup>池水の白いのが
- 見えと   <sup>\*2</sup>丁度ころで、<sup>\*3</sup>夜目にも夕月どの
- に無體なことを挑んでおゐでになる大殿
- 様の姿を、不図垣間見たことがございま
- す。
- 狹霧。あの猿も可哀さうに、一緒に焼き殺さ
- れたさうでございますね。
- 螢火。何處を如何してあの洛外の雪消の御所
- まで忍んで往つたか、獸なからもちぢら
- しいではございせんか。

\*1 話に聴いただけ

\*2 い。

〔ここまで五四【五六】枚目。〕  
〔右欄外に書き込み。〕

〔網掛け部分、見えるとところでの「る」の脱落か。〕



眞菰。話に聴いただけで\*<sup>1</sup>も怖ろし\*<sup>2</sup>このや

□□うなことになつたのも、みんなあの地獄

□□変の屏風から。□□□□□□□□□□□□□□

\*<sup>3</sup>が

□□若殿\*<sup>3</sup>心配さうな顔付にて出づ。□□□□□□

若殿。父上のおん悩みはどんな工合ぢや。□

狭霧、はい、やはり夕方になりますと、悶え

□□苦しんでお悩みになります。□□□□□□□□

若殿。さうか。日も夜も護摩の火を焚いて、

□□修法サホウしつづける加持祈祷も、いまだに験

□□がないと見えるな。□□□□□□□□□□□□

螢火。もう一月あまりになりますのに、おん

□□悩みの御様子は、少しもお変りになりま

□□せん。□□□□□□□□□□□□□□□□

若殿。世上でいろいろ取沙汰を致して居ると

□□云ふことだが、早く御平癒にならないと、

□□\*<sup>4</sup>噂は\*<sup>5</sup>ひろまつてゆくばかりだらう。困つ

□□\*<sup>4</sup>怪しい□□\*<sup>5</sup>せんせん□□\*<sup>5</sup>日毎夜毎に、たことになつ

〔行間書き込み。〕

たものだ。

近侍の者出づ。

近侍。横川の僧都様がおめでになりました。

\*1 女房達は几帳のあなたに入る。

大殿。丁度よい。直ぐにこちらにお通し申せ。

近侍去る。\*1 間もなく横川の僧都出づ。

若殿。ああ、阿闍梨様にはようこそお訪ね下

さいました。さあ、どうぞこちらへ。

僧都。御免下され。若殿にもさぞかし御心配

なことござ因う。

若殿。はい、何分うるさいは世上の取沙汰、

それゆえ一層心がかりに存ぜられます。

僧都。不思議やこの度の大殿のおん悩みに、

如何なる加持祈祷もその験なく、法力も

今を限りかと思え申す。僧尼検校の役を

勤むるわ札が身に取つて、これ程あさま

しく無念の思ひを致したことは、いまだ

嘗てござりませぬ。

〔ここまで五五【五七】枚目。〕

〔右欄外下方に二行に亘り書き込み。〕

\*2に極つて  
居ります

若殿。何か生靈とか死靈とか申すやうな、怖

□□ろしいものの怪が憑いてゐるのでござい

□□ますか。□□□□□□□□□□□□□□

僧都。さあ、それにはいささか思ひ當ること

□□もございますが、わたくしの口からはは

□□つきりそれとは申し上げられませぬ。□

若殿。それではやはり世間で噂を致す通り。

僧都。いや、よしなき世上の噂などは、心に

□□お懸けにならぬがようございます。なあ

□□に如何なる\*1魔障●なりとも、やがては不

□□断の法\*1に執念き□□力のために、調伏せら

□□るる\*2せまひませせり。今日よりは一層修

□□法を厳かに、加持祈祷を續けさせませう。

若殿。今は唯法力のみが頼みでございます。

□□どうかよろしくお願ひ致します。□□□□

□□近侍出づ。□□□□□□□□□□□□□□

□□<sup>(貞光)</sup>蓬の拂ひませうか。□□

\*3 貞光

\*4 ああ、若殿。

近侍\*3。\*4良秀どのが見えられました。\*5かねてお

〔行間書き込み。〕

〔ここまで五六【五八】枚目。〕

〔\*2への挿入部分、五行目、上欄外、行頭ニマス分にかけて書き込み。〕

吩咐の地獄変の屏風が、やつと出来致し  
 たゆゑ、持参致したといふ御口上にごぢ  
 ります。<sup>\*6</sup>良秀がまるつたとな。

若殿。なに、地獄変の屏風が出来致した。<sup>\*6</sup>

近侍<sup>\*7</sup>。はい、<sup>8</sup>かねてお吩咐の地獄変の屏風が、

<sup>\*7</sup>貞光<sup>\*8</sup>それにかう云ふ場合も関はず、やつと

出来致したゆゑ、持参致したと申して居

上て居ります。

若殿。なに、地<sup>\*9</sup>変の屏風出来、持参致したと

<sup>\*9</sup>獄

申して居るのか。

貞光。はい。如何致しませう。持ち販るやう

に申しませうか。

若殿。(思案してゐる)

貞光。何と云つても大殿の●の度のお悩みの

因はと云へば、 あの地獄変の屏風でこ

ぎいます。それが出来致したからと云つ

て、かう云ふお取込の最中に、持込んで

〔左欄外に書き込み。〕〔ここまで五七〔五九〕枚目。〕

□□来る大だわけ、追つ拂つてしまひませう。  
 □□貞光立ち上らうとするのを僧都留める。

●僧都。いや、待たれい<sup>\*1</sup>。●ささか思ふところ

□□も<sup>\*2</sup>あれば、地獄□□<sup>\*1</sup>(若殿に)変の屏風持参

□□□□<sup>\*2</sup>「ござります」のまま、良秀をここへお通し

□□になつたら如何でござります。□□□□

若殿。阿闍梨様がさう云はれるならば、何の

□□異存もござりませぬ。(貞光に向ひて)今横

□□川の僧都様の云はるる通りだから、関は

□□ずここへ通したがいい。□□□□□□□□

貞光。それでもあの地獄変の屏風などを。□□

若殿。まあ、よいからお通し<sup>\*3</sup>がよい。□□□□

□□<sup>\*3</sup>た

〔左欄外に書き込み。〕(「ここまで五八【六〇】枚目。)

□□貞光不承不承に去る。□□□□□□□□  
 □□問もなく貞光に案内されて、□良秀は<sup>\*1</sup>ひび

□□<sup>\*1</sup>明る●輝やか<sup>\*2</sup>顔付をして出て来る。

□□その後から<sup>\*3</sup>秀<sup>\*2</sup>いた<sup>\*1</sup>起とが、出来上つた

〔右欄外下方から一行目行末ニマス分にかけて書き込み。〕

<sup>\*1</sup>これまで見られな  
 かつたやうな



□□匠様の描かれた屏風にけちを附ける気か。

●真光。けちを附けるのではない。ほんとのこ

□□とを云つてゐるのだ。□□□□□□□□\*2鎮

若殿。これ、これを云ひ争つてゐる。●\*2

□□まゆまらぬか。(良秀に向つて)良秀。そ

\*4のやうな

□□ちは\*3今申し\*4本\*4ことを申して居るのか。□

良秀。(和\*3正気でやかに笑つて)勿論正気で申

□□して居ります。良秀如何に画道に魂を

□□●打ち込みまでも、いまだ乱心は致しま

□□せぬ。(護摩壇の方を見て)若殿。もおはや加

□□持祈禱をお止め●せになつたら如何でご

□□ざいます。□□□□□□□□□□□□□□

若殿。なに、加持祈禱をやめさせいと申すか。

僧都。(奮然として)●おこれは聴き棄ててに

□□ならぬ言葉ぢや。良秀。加持祈禱を止め

□□させいと申すのには、何おか思ふ仔細\*4あ

□□らう。先づそれから聴かうぢや\*5ない\*4が

〔行間書き込み。〕







この時几帳の奥から大殿の聲が聴こえる。

大殿の聲。良秀がまゐつたらしいが、<sup>\*2</sup>地獄変

の屏風は、もはや出来致した

<sup>\*2</sup>かねて吩咐け

であらうか。若し持参致した

置いたも

のならば、早う見たい。肉はぬからこち

らに運び入れい。

若殿。●若殿も僧都もその聲を聴いてひゅく<sup>\*3</sup>

<sup>\*3</sup>驚く。

若殿。おお、あれはまさしく父上のお聲ぢや。

さきほどまでおん悩みの褥の上に、横は

つて、おるでになつたとも思はれぬほど、

力強いあの聲音は。

<sup>\*1</sup>れ

僧都。(眩くやうに切れ切<sup>\*1</sup>)。法力の限りを盡く

しても、御平癒にならなかつた●大殿様

が。(問。)今のあの聲は悩みある身とも

思はれぬ。(護摩壇の方を見て)護摩の火

はあのやうにももの凄しく燃えてゐるのに。

〔<sup>\*2</sup>への挿入部分、一六行目行末四マス分+一文字下欄外、一七行目行末一七〜一九マスを使用し、書き込み。〕

〔左欄外に書き込み。〕〔ここまで六二【六四】枚目。〕

〔行間書き込み。〕



- 上は月卿雲客から、下は乞食非人に至る  
 まで、よくも寫しよくも描いた。牛頭馬  
 頭の獄卒に虐まれて、大風に吹き散らさ  
 るる落葉のやうに、\*1八方へ遁げ惑つてゐ  
 る罪人達。(間) お\*1四方お、多くの亡者  
 が壘々と五体を貫かれてゐる刀樹の上、  
 中空から落ちてゐる一輛の車。(間) 悶  
 え苦しんでゐる女房の姿は、さながらこ  
 の繪の怖ろしさを、一心に集めたやうに  
 思はるるぞ。

## \*2 几帳

- 大殿は狂喜して●\*2の蔭より現はれる。  
 大殿、良秀。見事ぢや、見事ぢや、これでこ  
 そあつばれ本朝第一の繪師ぢや。

\*1 僧都画を見て感心する。

\*1

- 良秀。(冷やかに落ち付いたまま) お褒めにあづか  
 りまして、身にあまる仕合せに存じます

〔行間書き込み。〕

〔ここまで六四【六六】枚目。〕

〔右欄外に書き込み。一行目の前に挿入指示。〕





【こ】まで六五【六七】枚目。】

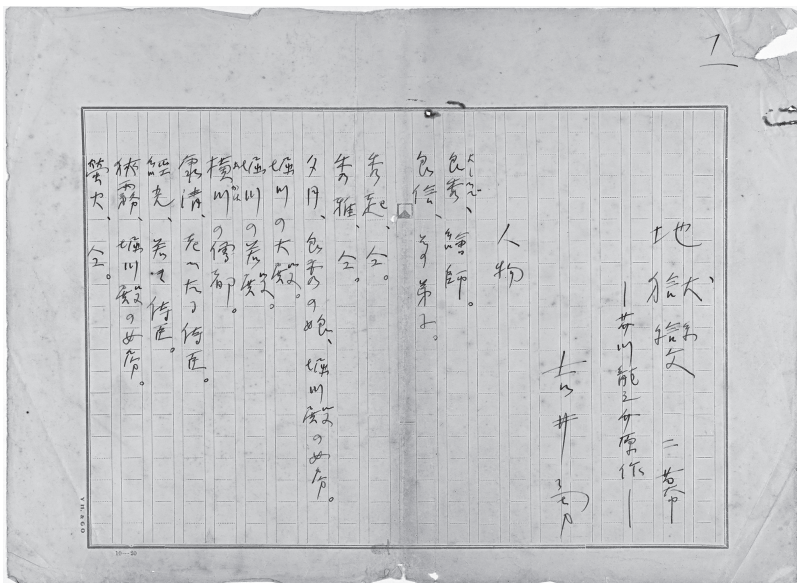
注

(1) 『京都女子大学通信』一一四号(二〇一五・一〇・一)「図書館資料紹介 絵と歌が描き出すこの世の地獄『地獄変絵巻』」(一一～一二頁)、京都女子大学創基百周年記念特別企画展観図録『京女一〇〇年の至宝』(二〇二〇・一一・一六)「地獄変絵巻」(三九頁) 参照。

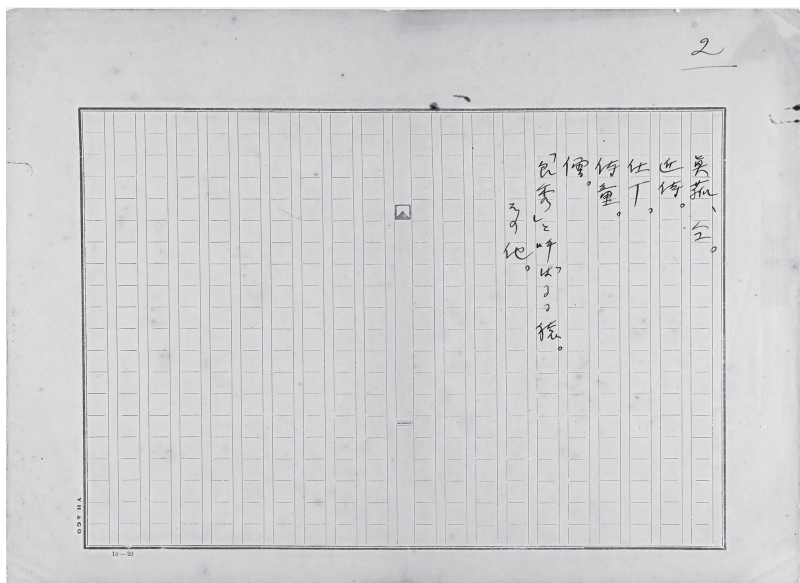
(2) 『地獄変絵巻』の成立は、巻末に「地獄変絵巻を見てつくれるうた八首 洛中忘吾亭にて 相聞歌隠 勇」とあるところから、勇が京都市内に居住した期間(昭和十三年十月～左京区北白川東葛町→同十九年十月～二十年二月岡崎円勝寺町、二十三年八月～上京区油小路元誓願寺町→二十六年八月～左京区浄土寺石橋町)のうちのいずれかである(定本 吉井勇全集)第九卷(昭和五四・一一 一番町書房)所収年譜参照。吉村忠夫は、本絵巻と同趣の作品を外にも残しており、福岡市美術館所蔵の「地獄変」の制作年が昭和二十五(一九五〇)年(同美術館HP所載、「コレクション」[https://www.fukuoka-art-museum.jp/archives/modern\\_arts/3149?title=&name=%E5%96%89%E6%9D%91&year=1950&genre=&collection=](https://www.fukuoka-art-museum.jp/archives/modern_arts/3149?title=&name=%E5%96%89%E6%9D%91&year=1950&genre=&collection=))、吉村忠夫画の「名作絵物語 地獄変」は雑誌『苦楽』第四卷第八号所載(昭和二十四年八月発行)、吉村の没年なども考慮すると、これらの諸作と同時期のものと推定されることから、吉井の油小路元誓願寺町時代の成立と目される。

○京都府立京都市学・歴史館には貴重な資料の閲覧・翻刻並びに画像掲載を許可いただきました。また、同館資料課の皆様たいへん御世話になりました。厚く御礼申し上げます。

○原稿ノンブル18(本誌89頁)の下欄外の書き込み部分の内、二箇所漢字の判読にあたり、中前正志先生、坂本信道先生、中西俊英先生にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。



画像1 (ノンプル1) 表題・登場人物紹介



画像2 (ノンプル2) 登場人物紹介続き

